

高校での部活動経験が大学生の対人恐怖心性に与える影響：チャムシップ体験，ソーシャルスキルに着目した検討

石川，嵩晴
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/7177885>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 15, pp.5-11, 2024-03-15. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



高校での部活動経験が大学生の対人恐怖心性に与える影響

—チャムシップ体験，ソーシャルスキルに着目した検討—

石川嵩晴 九州大学大学院人間環境学府

要約

本研究では，対人恐怖心性を抑制する集団の特徴を高校の部活動を対象として検討した。まず，対人恐怖心性を規定する要因として，「親の養育態度」，「チャムシップ体験」，「ソーシャルスキル」を想定し，性別や親の養育態度等を統制変数，チャムシップ体験と各ソーシャルスキル，養育態度とチャムシップ体験・各ソーシャルスキルの交互作用項を説明変数，対人恐怖心性を目的変数として重回帰分析を行った。その結果，「関係開始スキル」，「関係維持スキル」，「主張性スキル」が対人恐怖心性を有意に抑制することが示された。次に，対人恐怖心性を抑制すると考えられる「関係開始スキル」，「関係維持スキル」，「主張性スキル」を高める集団の特徴を把握するために，部活動の特徴との関連を検討した。その結果，「強制入部」が「関係開始スキル」と関連し，「部顧問の成果主義」および「大会や発表場面の人数」が「主張性スキル」と関連していることが示された。以上より，それらの特徴を含む集団においては，個人の対人恐怖心性が抑制されることが示唆された。

キーワード：対人恐怖心性，集団の特徴，ソーシャルスキル

I 問題と目的

1. 対人恐怖心性と大学での適応

対人恐怖心性とは，対人恐怖の「主として恐怖や不安のために対人関係の在り方に関して困難を抱えている状態」（北山，2002）が広く一般の人々にも見られる心理的な傾向のことを指す（堀井，2012）。社会において人と人との交流は必要不可欠なものであり，こうした対人関係への不安や恐怖をもつ者は，様々な場面で問題や困難に直面する可能性が高くなると考えられる。

堀井（2021）が1993年・2008年・2018年に大学生を対象に実施した調査から，対人恐怖心性はここ30年で増加傾向にあることが明らかにされている。加えて，大学生の学年別の調査（堀井，2012）では，大学1年生の「自分や他人が気になる悩み」や「集団に溶け込めない悩み」等の対人不安意識が，他の学年と比べて有意に高いことも示されている。この理由について堀井（2012）は，大学生になると高校までのクラス等の強い凝集性が失われ，集団意識が不安定になりやすいという点を挙げており，大学の初期適応の失敗は不登校やひきこもり，中退の危険性を孕む可能性があることを指摘している。凝集性が低いいため，自ら積極的に他者と関わらなければ対人関係を築くことが難しい大学において，他者との関わりに不安や恐怖を抱きやすい学生は，対人関係に悩み，次第に学校に来なくなることが懸念される。こうした大学生の対人恐怖心性の増加傾向とそれに伴う不登校や中退の懸念が考えられることを踏まえても，対人恐怖心性は抑制・軽減すべき重要な心理的な課題であると言える。

また，大学入学後において，実際に対人関係等に悩む人への支援も重要であると思われるが，大学に入って対人関係の問題が顕在化してから対処するよりも，高校の段階で予防的にアプローチする方が，円滑に大学の生活に適應できることも考えられる。そのため，本研究では，高校に着目して，大学入学後の対人恐怖心性をいかに抑制するかについての検討を行う。

2. 対人恐怖心性と親の養育態度・チャムシップ体験・ソーシャルスキル

先行研究において，対人恐怖心性に関連する要因として様々なものが明らかにされているが，その中でも，親の養育態度や

親子関係が対人恐怖心性に影響を与えていることを示唆する研究は多い（Spokas & Heimberg, 2009；沖本，2001；大久保，2012；山崎・吉野・木下・小野，2012等）。例えば，社会不安に関して Spokas & Heimberg（2009）は，両親の過保護が大学1年生の社会不安と正の相関があることを明らかにしている。そして，対人恐怖心性に関しては，沖本（2001）が，幼少期に両親から過剰な期待や干渉，支配を受けた経験が大学生の対人恐怖心性を高めることを示している。大久保（2012）も，男性の場合は母親の過保護が，女性は両親の養護の欠如が対人恐怖心性を高めることを明らかにしている。このように，様々な研究において，対人恐怖心性が親の養育態度，特に過保護な養育態度と密接に関連していることが明らかになっている。

一方で，対人場面や対人関係は友人等の両親以外との関係でも経験される。そのため，両親以外の対人関係が対人恐怖心性に影響を与えることも十分に考えられるだろう。実際に，水間ら（2015）の研究においては，小学校高学年から中学校までの前青年期に特定の同性同年配との親密な1対1の友人関係を築く体験であるチャムシップ体験が，親の過保護によって生じた対人恐怖心性を矯正する修正体験になることを示唆している。その他にも，Greca & Harrison（2005）の研究では，青年期の親友関係における承認や支援などの肯定的な側面が，社会不安を低下させる可能性を示している。これらのことから，両親以外の交友関係が対人恐怖心性を規定するひとつの要因として考えられ，チャムシップ体験や親友関係等の親密な対人関係は対人恐怖心性を抑制する要因として推察される。

加えて，同研究（Greca & Harrison, 2005）では，親友関係において衝突や批判などを強く感じていた青年は，より社会不安を強く感じていたことを明らかにしており，青少年の対人機能を改善する取り組みが，社会不安を予防するために重要である可能性を示唆している。そのため，対人関係スキルのひとつであるソーシャルスキルも対人恐怖心性を抑制するひとつの要因として考えられる（Turini & Regina, 2014；杉山・小関・菊島，2019）。実際に，ソーシャルスキルと対人恐怖心性の関連について，杉山ら（2019）が，「関係開始」と「関係維持」のソーシャルスキルの自己評価が低い人は対人恐怖心性が高い傾向にある

ことを示している。このことから、チャムシップ体験同様に、ソーシャルスキルの自己評価を高めることができれば、対人恐怖心を抑制することができると推察される。

また、こうしたチャムシップ体験とソーシャルスキルの形成・獲得については、所属している環境や集団によって変化するとと思われる。そのため、チャムシップ体験やソーシャルスキルを高める集団の考察は、結果として対人恐怖心を有効に抑制する支援につながると考えられる。

3. 部活動とソーシャルスキル

ソーシャルスキルを高める代表的な方法としては、ソーシャルスキルトレーニングが挙げられるが、その他にも所属する集団によって、ソーシャルスキルの高さが異なるという研究もある。崔（2018）は大学生を対象とした研究を行い、運動部において団体種目をしていただた人の方が、個人種目をしていただた人よりも「問題解決」、「トラブル処理」、「コミュニケーション」のソーシャルスキルが有意に高いことを示した。また、学校現場においては、専門的な知識やプログラム実施のための時間が必要となるソーシャルスキルトレーニングの実施よりも、集団の中でソーシャルスキルの向上を図る事のできる環境整備の方が実施しやすいのではないかと考えられる。そのため、こういった集団の特徴がソーシャルスキルを高めやすいのかの検討も必要になるだろう。

そして、高校生のソーシャルスキルの向上に関連する集団活動の1つに、部活動がある。部活動では、活動時間や部顧問の態度等、学校内でも異なる集団の特徴が多くあるため、集団の特徴を幅広く比較することが可能であると考えられる。加えて、学校の部活動では、年度ごとのメンバー交代もなく、集団行動する場面も多いため、ソーシャルスキルだけでなく、チャムシップ体験も比較的、経験しやすい集団であるとも思われる。つまり、部活動の集団の特徴を詳細に調査することで、その特徴がソーシャルスキルのみならず、チャムシップ体験にどう影響するかを検討することもできると考えられる。

4. 本研究の目的

以上より、本研究では親の養育態度を統制した上で、チャムシップ体験とソーシャルスキルの自己評価が対人恐怖心に与える影響を分析することから、部活動をもとに対人恐怖心を抑制し得る集団の特徴を把握することを目的とする。

Ⅱ 方法

1. 調査対象

4年制大学の1年生165名（性別に関する質問への回答：男性47名、女性114名、その他3名、答えたくない1名）から質問文・設問文を明らかに理解していないと思われる者を除いた137名（性別に関する質問への回答：男性47名、女性86名、その他3名、答えたくない1名）を対象とする。質問文・設問文を明らかに理解していない者の例として、「各年次の1週間あたり、平均してどれくらい新型コロナウイルスによって部活動の制限を受けたか」に対して「60日」や「30日」などと回答している者は今回のデータから除外した。平均年齢は18.68歳（SD=0.79）であり、最低年齢は18歳、最高年齢は23歳であった。

2. 調査時期

令和4年10月に調査を実施した。

3. 調査方法

大学の講義の一部の時間を利用して質問紙調査を行った。

4. 調査内容

1) 基本的属性

年齢、性別について回答を求めた。

2) 対人恐怖心性

対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1997）を使用した。この尺度は「自分や他人が気になる悩み」、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「目が気になる悩み」、「自分を統制できない悩み」、「生きることに疲れている悩み」の6つの因子から構成されていた。各下位尺度は5項目からなり、全30項目で構成され、7件法（0. 全然当てはまらない～6. 非常に当てはまる）にて回答を求めた。各因子について、「自分や他人が気になる悩み」は、「他人が自分をどのように思っているかとても不安になる」等の項目から構成され、対人関係において、自分のことを評価する他者と評価される自己への過剰な意識による観念的な悩みを表す因子であった。「集団に溶け込めない悩み」は、「グループでのつき合いが苦手である」等の項目から構成され、集団に対する違和感や不適合感、集団に溶け込んで自由にかつ適切に振る舞えないという悩みを表す因子であった。「社会的場面で当惑する悩み」は、「会議などの発言が困難である」等の項目から構成され、様々な社会的場面における「あがり」「スピーチ不安」等にまつわる悩みを表し、社会的内向傾向をもつ者が抱きやすい社会的不安意識を表す因子であった。「目が気になる悩み」は、「人と目をあわせていられない」等の項目から構成され、他者とまなざしが合うことや他者から見られることに対する不安や恐れなどの悩みを表す因子であった。「自己を統制できない悩み」は、「意志が弱い」等の項目から構成され、自分の意志や感情を統制できないことに対する不安や不満などの悩みを表す因子であった。「生きることに疲れている悩み」は、「生きていることに価値を見いだせない」等の項目から構成され、生きることへの充実感が持てず、心身の不調を訴えるというような悩みを表す因子であった。

3) 幼少期の親の養育態度

Parental Bonding Instrument（PBI: Parker, Tupling & Brown, 1979）の日本語版（小川，1991）を使用した。この尺度は16歳以前の幼少期における両親のそれぞれの養育行動について回顧的に回答させるもので、親の愛情・冷たさの軸を示す養護因子と親の過干渉・自律性の軸を示す過保護因子の二次元で評価される。「暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた」「よく私に微笑みかけた」等の質問項目を含む養護因子が12項目、「私のすることはすべてコントロールしようとした」「私のプライベートをおかした」等の質問項目を含む過保護因子が13項目の計25項目から構成され、4件法（0. 全く違う～3. 非常にそうだ）にて回答を求めた。

4) ソーシャルスキル

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）を使用した。この尺度は「記号化」、「解説」、「感情統制」、「関係開始」、「関係維持」、「主張性」の6つ下位尺度から構成されており、全35項目を4件法（1. ほとんど当てはまらない～4. かなり当てはまる）にて回答を求めた。記号化とは、「感情を素直にあらわせる」等、表情や身振りによって、自分の感情を素直に表現するスキルである。そして、解説は、「顔つきから相手

の感情を読み取れる」等、相手の変化に気づいたり、気持ちを押し量ったりするスキルのことである。感情統制は、「気持ちをおさえようとしてもそれが顔に現れてしまう（逆転項目）」等、自分の感情を表情に出さないように抑制するためのスキルである。関係開始とは、「相手とすぐに、うちとけられる」等、新しく関係を開始するスキルのことである。関係維持は、「相手の立場を考えて行動する」等、相手との良好な関係を維持するスキルである。最後に、主張性は、「自分が不愉快な思いをさせられたときにははっきりと苦情を言う」等、自分の感情や考えを相手に伝えるスキルのことである。

5) チャムシップ体験

チャムシップ体験尺度（田中・吉井，2005）を使用した。この尺度はチャムシップ体験の高低を表し、全12項目から構成される。回答にあたっては、高校の部活動内の友人関係を想起させ、5件法（1. あてはまらない～5. よくあてはまる）にて回答を求めた。

6) 部活動に関する項目

「部活動の所属」、「部活動の特徴」、「大会・発表等の場面」、「練習場面」についての質問項目を作成し、使用した。部活動の所属では、部活動に所属していたか、強制的に入部させられたのかについて、「所属・無所属」、「強制入部・非強制入部（自主的）」の選択肢から回答させ、部活動名については自由記述で回答を求めた。部活動の特徴では、部活動の1週間あたり平均頻度を「1日～7日」の7つの選択肢、一日の平均活動時間を「1時間～6時間以上」の6つの選択肢、部活動のレベルを「1. 市町村下位～5. 全国上位」と「6. 該当しない」の6つの選択肢、部顧問の態度を「成果主義・関係主義・放任主義・該当しない」の4つの選択肢から回答を求めた。大会・発表等の場面では、人数を自由記述、協働性を「1. 連携が少ない～5. 連携が多い」の5件法で質問した。練習場面については人数を自由記述、協働性を「1. 連携が少ない～5. 連携が多い」の5件法、練習場面全体を通したコミュニケーション量を「1. 少ない～5. 多い」の5件法で回答を求めた。

7) 新型コロナウイルスに関する項目

新型コロナウイルスによって部活動がどれだけ制限を受けた

か、質問項目を作成し、使用した。具体的には、「新型コロナウイルスによって1週間あたり平均して何日程度、部活動が制限されたか」を年次ごとに自由記述で回答を求めた。

5. 倫理的配慮

調査を行う際の倫理的配慮として、「今回の調査への回答は自由であり、回答しない、途中で回答をやめる場合に調査参加者に不利益は生じないこと」、「学術的な目的のみで利用し、個人が特定されることは絶対ないこと」を質問紙の表紙に示し、口頭での説明も同時に行い、同意を得た者に回答を求めた。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の確認的因子分析

対人恐怖心性尺度・PBI日本語版（母親・父親）、チャムシップ体験尺度、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の因子構造を検討するために、全ての因子間に共分散を仮定したモデルについて、最尤法による確認的因子分析を実施した（表1）。その結果、CFIが全ての尺度で.90未満、RMSEAが全ての尺度で.08以上、SRMRがチャムシップ体験尺度を除いた尺度全てで.08以上と一般的な基準と比較しても十分な適合度指標を示しているとは言えなかった。この結果については、本研究でのデータ数が因子分析を実施するためには不十分であったことの影響が考えられたため、十分なデータ数に基づいている先行研究で示された因子構造に基づいて、その後の分析を実施することとした。ただし、対人恐怖心性尺度に関しては、下位尺度間の相関において全ての組合せで正の値が得られ、因子間相関が $r = .81$ を超えるなど全般的に中程度から強い相関が見られたこと（表2）に加えて、チャムシップ体験等と包括的な対人恐怖心性の傾向との関連を検討するという研究目的を考慮し、全項目得点の平均値を対人恐怖心性得点として扱うこととした。また、対人恐怖心性尺度全項目の α 係数は.96であった。

2. 各尺度の相関

各尺度の関連を検討するため、対人恐怖心性、PBI日本語版、チャムシップ体験尺度、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の下位尺度について相関分析を行った（表3）。まず、対人恐怖心性とその他の尺度に関して、両親の過保護では正の相関が見

表1 各尺度の確認的因子分析の結果

	χ^2	df	p	CFI	RMSEA	SRMR
対人恐怖心性尺度（6因子）	899.98	390	.00	.83	.10	.09
対人恐怖心性尺度（1因子）	1509.68	405	.00	.63	.14	.10
PBI日本語版（母親）	765.14	264	.00	.74	.12	.09
PBI日本語版（父親）	634.96	274	.00	.80	.10	.10
チャムシップ体験尺度	213.17	54	.00	.85	.17	.06
成人用ソーシャルスキル自己評定尺度	906.01	545	.00	.78	.08	.11

表2 対人恐怖心性尺度における下位尺度間の相関分析の結果

	自分や他人が 気になる悩み	集団に溶け 込めない悩み	社会的場面で 当惑する悩み	目が気になる悩み	自分を統制 できない悩み
集団に溶け込めない悩み	.55	**	—		
社会的場面で当惑する悩み	.55	**	.81	**	—
目が気になる悩み	.51	**	.68	**	.73
自分を統制できない悩み	.57	**	.59	**	.60
生きることに疲れている悩み	.63	**	.53	**	.47

** $p < .01$

られ（母親： $r = .47, p < .01$ ；父親： $r = .22, p < .05$ ），解読を除いたそれ以外の尺度では負の相関が見られた（ $r = -.65 - -.23$ ）。

3. チャムシップ体験尺度，成人用ソーシャルスキル自己評定尺度と対人恐怖心性の階層的重回帰分析

性別・新型コロナウイルスの制限・親の養育態度からの影響を統制した上で，チャムシップ体験・ソーシャルスキルと対人恐怖心性との関連を検討するため，重回帰分析を行った。重回帰分析においては，統制変数として性別・新型コロナウイルスの制限・PBI日本語版を，説明変数としてチャムシップ体験尺度・成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各下位尺度・PBI日本語版とチャムシップ体験尺度の交互作用項・PBI日本語版と成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各下位尺度の交互作用項を，目的変数として対人恐怖心性を設定し分析を行った。なお，交互作用項投入時の多重共線性の危険性を低減するため，中心化処理としてPBI日本語版，チャムシップ体験尺度，成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各変数は，平均値からの偏差に変換して分析を行った。

まず，統制変数である性別と親の養育態度，コロナの制限を説明変数として強制投入法による重回帰分析を行った結果，母親の過保護が有意であった（ $\beta = .45, p < .01$ ）（表4）。また，コロナの制限については有意ではなかった（ $\beta = .11, p = .34$ ）。そして，前述の性別等を統制変数，チャムシップ体験尺度・成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各下位尺度・PBI日本語版

とチャムシップ体験尺度との交互作用項（変換後のPBI日本語版の得点とチャムシップ体験尺度の得点との積）・PBI日本語版と成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各下位尺度の交互作用項（変換後のPBI日本語版の得点と成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各下位尺度の得点との積）を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った結果，関係開始（ $\beta = -.33, p < .01$ ）と主張性（ $\beta = -.28, p < .01$ ），関係維持（ $\beta = -.29, p < .05$ ）の3つが投入され，有意な影響が見られた（表5）。また，PBI日本語版とチャムシップ体験尺度・成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各下位尺度の交互作用項については有意ではなかった（母養護*チャムシップ体験： $\beta = -.03, p = .72$ ；母養護*関係開始： $\beta = .14, p = .20$ ；母養護*解読： $\beta = .07, p = .44$ ；母養護*主張性： $\beta = -.01, p = .89$ ；母養護*感情統制： $\beta = -.14, p = .16$ ；母養護*関係維持： $\beta = -.05, p = .66$ ；母養護*記号化： $\beta = -.11, p = .27$ ；過保護*チャムシップ体験： $\beta = .06, p = .54$ ；母過保護*関係開始： $\beta = .08, p = .43$ ；過保護*解読： $\beta = .13, p = .14$ ；母過保護*主張性： $\beta = -.11, p = .25$ ；母過保護*感情統制： $\beta = .14, p = .16$ ；母過保護*関係維持： $\beta = .09, p = .32$ ；母過保護*記号化： $\beta = .04, p = .69$ ；父養護*チャムシップ体験： $\beta = -.01, p = .96$ ；父養護*関係開始： $\beta = .12, p = .19$ ；父養護*解読： $\beta = .12, p = .17$ ；父養護*主張性： $\beta = .03, p = .78$ ；父養護*感情統制： $\beta = .05, p = .60$ ；父養護*関係維持： $\beta = .02, p = .84$ ；父養護*記号化： $\beta = -.18, p = .07$ ；父過保護*チャムシッ

表3 各尺度の相関分析の結果

	対人恐怖 心性尺度	養護 (母)	過保護 (母)	養護 (父)	過保護 (父)	チャムシップ 体験尺度	関係開始	解読	主張性	感情統制	関係維持	記号化
対人恐怖心性尺度	—											
養護（母）	-.44 **	—										
過保護（母）	.47 **	-.66 **	—									
養護（父）	-.29 **	.61 **	-.56 **	—								
過保護（父）	.22 *	-.50 **	.67 **	-.55 **	—							
チャムシップ体験尺度	-.23 *	.25 *	-.18	.19	-.18	—						
関係開始	-.65 **	.25 *	-.30 **	.19	-.12	.31 **	—					
解読	-.14	.09	-.04	.04	-.06	.26 **	.28 **	—				
主張性	-.34 **	.02	-.11	.15	-.02	.05	.33 **	-.02	—			
感情統制	-.31 **	.06	-.31 **	.09	-.15	-.10	.20 **	-.02	.08	—		
関係維持	-.47 **	.18	-.25 *	.11	-.07	.28 **	.51 **	.45 **	.32 **	.44 **	—	
記号化	-.36 **	.26 **	-.19	.28 **	-.17	.52 **	.59 **	.23 *	.36 **	-.09	.46 **	—
α 係数	.96	.93	.89	.93	.86	.94	.89	.88	.75	.69	.65	.78
平均点	2.98	2.39	0.78	2.16	0.54	4.27	2.41	2.73	2.38	2.47	3.05	2.80
標準偏差	1.13	0.56	0.55	0.65	0.44	0.86	0.64	0.57	0.51	0.60	0.47	0.66

*, $p < .05$, **, $p < .01$

表4 性別・養育態度・コロナと対人恐怖心性の重回帰分析の結果

	β
性別	.16
養護（母）	-.02
過保護（母）	.45 **
養護（父）	-.17
過保護（父）	-.23
コロナ	.11
R^2	.11 *

*, $p < .05$, **, $p < .01$

表5 養育態度等を統制変数としたチャムシップ体験等と対人恐怖心性の重回帰分析の結果

	β
性別	.05
養護（母）	-.05
過保護（母）	.27 *
養護（父）	-.15
過保護（父）	-.18
コロナ	.12
関係開始	-.33 **
主張性	-.28 **
関係維持	-.29 **
R^2	.51 **

*, $p < .05$, **, $p < .01$

ブ体験： $\beta = -.04, p = .71$ ；父過保護・関係開始： $\beta = .03, p = .74$ ；父過保護・解読： $\beta = .11, p = .23$ ；父過保護・主張性： $\beta = -.13, p = .20$ ；父過保護・感情統制： $\beta = .12, p = .19$ ；父過保護・関係維持： $\beta = .02, p = .83$ ；父過保護・記号化： $\beta = .01, p = .94$ ）。

4. 部活動に関する項目と関係開始・主張性・関係維持の重回帰分析の結果

どのような部活動の集団の特徴が、3の分析で明らかになった対人恐怖心性を抑制する関係開始・主張性・関係維持のスキルの自己評価を高める要因になるのかを検討するため、強制入部の有無や活動時間、活動日数等の部活動に関する項目を説明変数、関係開始・主張性・関係維持をそれぞれ目的変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。

まず、各部活動の特徴を説明変数、関係開始スキルの自己評価を目的変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、強制入部が投入され、有意な影響が見られた（ $\beta = .33, p < .05$ ）（表6）。

表6 各部活動の特徴と関係開始の重回帰分析の結果

	β	
強制入部	.33	*
R ²	.09	*

*: $p < .05$

次に、各部活動の特徴を説明変数、主張性スキルの自己評価を目的変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、部顧問の成果主義（ $\beta = .36, p < .01$ ）と大会・発表の人数（ $\beta = -.26, p < .05$ ）の影響が有意であった（表7）。

表7 各部活動の特徴と主張性の重回帰分析の結果

	β	
部顧問（成果主義）	.36	**
大会・発表の人数	-.26	*
R ²	.15	*

*: $p < .05$, **: $p < .01$

最後に、部活動の特徴を説明変数、関係維持スキルの自己評価を目的変数とした重回帰分析を行った結果、関係維持に影響を与える変数は見られなかった。

IV. 考察

1. 養育態度・チャムシップ体験・ソーシャルスキルが対人恐怖心性に及ぼす影響

本研究では、親の養育態度を統制した上で、高校生の時の部活動におけるチャムシップ体験・ソーシャルスキルが対人恐怖心性とどう関連しているかを検討するために、相関分析と重回帰分析を行った。相関分析の結果、両親の過保護と対人恐怖心性に正の相関、両親の養護と対人恐怖心性に負の相関が見られた。また、チャムシップ体験と成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の解読を除く各下位尺度に関しては対人恐怖心性との負の相関が見られた。このことから、親の養育態度に関しては、親の養護が低かった・過保護だったと感じていた人は対人恐怖心性が高い傾向があることが示された。そして、チャムシップ体験とソーシャルスキルに関しては、高校の部活動の中でチャム

シップ体験を経験した人や高校生の時に解読を除くソーシャルスキルが高いと評価していた人は、対人恐怖心性が低い傾向にあることも示された。

そして、性別・新型コロナウイルスの制限・両親の養育態度を統制変数、チャムシップ体験、各ソーシャルスキル、両親の養育態度とチャムシップ体験・両親の養育態度と各ソーシャルスキルの交互作用項を説明変数、対人恐怖心性を目的変数とした重回帰分析では、「関係開始」、「主張性」、「関係維持」のスキルの自己評価が直接的に対人恐怖心性を低減させており、チャムシップ体験とその他のソーシャルスキルの影響は見られなかった。このことから、高校で「関係開始」、「主張性」、「関係維持」のスキルが高かったと自己評価している大学生は、大学での対人恐怖心性が低いことが明らかになった。この結果は、杉山ら（2019）の「関係維持」と「関係開始」のスキルを低く評価することが、対人恐怖心性を有意に高めるという結果を支持したと言える。杉山ら（2019）は、自分が新たに人間関係を形成する・維持するうえで、能力が乏しいために他者を不快にさせているのではないかと懸念が、対人恐怖心性の高まりに寄与していると考察している。本研究についても同様に、高校生の時点で新しい交友関係を形成・維持できると自己評価をしていた人は、他者を不快にさせる懸念や不安が低くなり、対人関係の開始や維持について自信が持てるため、凝集性の低い大学においても、対人関係に対する不安や恐怖が低くなるのだと考えられる。次に、主張性スキルの自己評価に関して、自分の感情や考えを適切に相手に伝えることができると自己評価する人は、自分の意見や考えが上手く伝わらないことによって、他者と衝突したり、不本意に他者の意見に従ったりすることが少なくなるため、自分の意見が言えない、伝わらないという不安がなくなり、対人恐怖心性が抑制されるのではないかと考えられる。

続いて、母親の過保護と対人恐怖心性の関連について述べた。鍋田（1997）は、多くの対人恐怖症者が、母親の存在感が強い環境で豊富な愛情を受けつつも、一定の嫉や要請に従うことを求められ、親の意向に沿わないと愛情が撤去されるという恐れを抱いていることを指摘している。本研究の結果からは、対人恐怖心性が高い人にも同様の傾向があることが推察された。つまり、対人恐怖心性が高い人も、鍋田（1997）が指摘した母親との関係性の中で育ち、その関係性が他者に反映され、常に他者の意向に沿わないと見捨てられるのではないかと不安を抱えやすいことが考えられた。他者と関わる度に見捨てられるのではないかと不安が生じるため、次第に人と接すること自体にも不安や恐怖を感じるようになり、結果として、対人恐怖心性が高まるのではないかと推察される。

次に、チャムシップ体験が相関分析では負の相関が見られた一方で、重回帰分析で対人恐怖心性に直接的な影響を与えなかった理由として、チャムシップ体験で得られるソーシャルスキルを同時に分析したことが考えられる。Greca & Harrison（2005）や水間ら（2015）において親密な友人関係が社会不安や対人恐怖心性を抑制していたのは、他者との親密な関わりの中で、関係開始スキルや関係維持スキル、主張性スキルが培われたためであり、それらのスキルと同時に分析にしたことで、チャムシップ体験の影響が見られなくなったのだと考えられる。このことから、親密な関係性が重要というよりも、対人関係の中で培われるソーシャルスキルが対人恐怖心性を抑制するために

は重要であると推察することができるだろう。しかしながら、今回の調査では、部活動内のチャムシップ体験のみを取り上げているため、今後はクラス等の部活動以外のチャムシップ体験と対人恐怖心性との関連についての検討も必要であると考えられる。

2. 集団の特徴がチャムシップ体験・ソーシャルスキルに与える影響

対人恐怖心性を抑制し得る集団の特徴を検討するために、部活動の特徴に関する項目を説明変数、ソーシャルスキルの中の「関係開始」「主張性」「関係維持」を目的変数として重回帰分析を行った。その結果、関係維持を高める集団の特徴は見られなかったが、強制入部が関係開始と、部顧問の成果主義と大会発表の人数が主張性と関連していることが明らかになった。

まず、関係開始スキルについて、田中・宮前（2016）は、浅い関係で用いられるスキルと関係開始スキルに相関があることを示し、特別に親密ではない友人関係においては、関係開始スキルが継続的に求められると述べている。つまり、学校の制度によって非自主的で部活動に対してモチベーションもない場合は、部活動に参加しようという動機づけや部員と関わろうとする動機づけが低いと考えられる。そのため、部員同士の関係性が深まらず、部活動に参加する際に関係開始スキルを継続的に使用して、部員と関わっていた可能性が推察される。それによって、関係開始スキルの自己評価が高まったのではないかと考えられる。しかしながら、この結果に関しては、慎重な検討が必要であると思われる。なぜなら、学校の制度によって強制的に部活動に入らなければならない状況で、どういった理由でその特定の部活動に入部を決めたかによって部員同士の関係性が異なると考えられるからである。例えば、部活動の入部を決める際に「友達がいるから」と「部活の頻度が少なく楽そうだから」とでは、部員との関係の形成へのプロセスが異なるだろう。そのため、今後の課題として、なにかしらの部活動に所属しなければならない状況においてなぜその部活動の選択したかについてのインタビュー等を用いた質的な調査も必要であると考えられる。

次に、部顧問の成果主義が主張性スキルを高めることについて考察する。部顧問のリーダーシップと部員の成績や練習態度について松原（1990）の研究では、中学校の部顧問のリーダーシップをP行動（課題達成行動）とM行動（集団維持行動）から測定し、部顧問のP行動が部活動の成績と指導者と部員の関係性、練習態度、実力評定と正の相関があることが示されている（松原，1990）。このことから、目標達成志向型、つまり成果を求める部顧問のリーダーシップは、部顧問や部員の良好な関係性や部活動に対する積極的な態度を促す可能性があり、そういった部活動内の関係性や部員たちの態度の中では、自身の目標達成や成果を上げるための自分の考えや主張を部顧問や他部員に伝えやすいと考えられる。また、部顧問や他部員と意見を出し合いながら練習を行った結果、大会や発表場面で良い成績が得られると、さらに関係性や練習態度が向上するという正のサイクルが生まれるのではないかと予想される。そのため、成果主義の部顧問がいる部活動では、部活動に意欲的な部員や部顧問との良好な関係の中で、自分の部活動や目標に対する考えを言い合えた経験やその経験が成績や結果として返ってくるという自信が主張性スキルを高めるのだろう。

最後に、大会・発表場面の人数の少なさが主張性を高める理由として、考えや意見を他人任せにすることができないことが考えられる。大会や発表場面の目標に向けて大人数で行動する集団では、自分の意見を言わずとも、目標に向けた行動の意思決定がなされることが多くなるだろう。それによって個人が積極的に自分の意見や考えを伝える機会が少なくなると思われる。一方で、少人数の種目や個人種目では、目標に向けた行動の意思決定を他人任せにすることができず、どうしたら目標を達成できるかを先生やチームメイトと話し合わなければならない場面が比較的多くなると考えられる。そういった他人任せにせずに行った意見交換の経験が、主張性のスキルの自己評価を高めたのではないかと推察できる。

3. まとめと今後の課題

本研究の結果を通して、「関係開始」「主張性」「関係維持」のソーシャルスキルの自己評価を高めることが対人恐怖心性を抑制する可能性が高いことが示され、その「関係開始」と「主張性」を高める集団の特徴としては、「強制入部」と「部顧問の成果主義」「大会・発表場面での人数」が関連していることが示唆された。つまり、強制的に人と関わる機会が多い集団や集団のリーダーが成員の主張や実績を認める集団、集団の方針や意思決定を他人任せにせずに積極的に意見を出さなければならない小集団が、上記のソーシャルスキルを高め、結果として大学における対人恐怖心性を抑制するのではないかと考えられる。

しかしながら、本研究で調査した部活動の特徴が集団の特徴をすべて網羅しているとは言えない。例えば、部活動内の先輩や後輩がソーシャルスキル等に対して影響を与えることもあるだろう。そのため、今後の課題として、より広く集団の特徴の調査を行う必要があると思われる。また、チャムシップ体験等の質問は、回顧的に回答を求めたため、その回答の正確さには懸念が残るだろう。加えて、高校の時点でのチャムシップ体験やソーシャルスキルと対人恐怖心性の因果関係を明確化できたわけではないことも本研究の限界として挙げられるため、今後、縦断的な調査も必要である。さらに、新型コロナウイルスの影響を十分に統制できなかったことも限界として考えられる。今回の調査では、新型コロナウイルスによって部活動が1週間あたりどれだけ制限されたかについてのみデータを収集した。しかしながら、その制限や期間などは地域の流行状況等によって大きく異なり、今回の質問でその実情を把握することは難しかった。したがって、新型コロナウイルスの影響が緩和されたなかでの調査も必要だと思われる。最後に、今回の結果を検討するにあたって、調査時期についても考慮する必要がある。今回は10月に行った調査をもとに統計的手法を用いて検討したが、研究の目的に則した調査を行うのであれば、大学1年生が入学した直後に調査を実施することが妥当である。10月に調査を行ったことによって、すでに高校から大学への集団の変化に適応し、入学直後と比べて、対人恐怖心性が低くなっていた可能性が考えられる。そのため、入学直後に同様の調査を行うことも求められるだろう。

〈付記〉

本論文は、筆者が鹿児島大学法文学部人文学科心理学コースに提出した卒業論文の一部に加筆・修正を加えたものです。調査にご協力いただきました皆様をはじめ、卒業論文の研究計画

から執筆までご指導いただきました昭和女子大学人間社会学部心理学科准教授の榊原良太先生、本稿執筆にあたりご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院准教授の小澤永治先生・九州大学大学院人間環境学府博士後期課程の指方賢太様に深く感謝申し上げます。

文献

- 相川充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. 東京学芸大学紀要, 第1部門 (教育科学), 56, 87-93.
- Annette M. La Greca & Hannah Moore Harrison (2005). Adolescent Peer Relations, Friendships, and Romantic Relationships: Do They Predict Social Anxiety and Depression?, Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 34, 1, 49-61.
- Bolsoni-Silva, Alessandra Turini & Loureiro, Sonia Regina (2014). The Role of Social Skills in Social Anxiety of University Students, Paidéia (Ribeirão Preto), 24, 58, 223-232.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (続報). 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 堀井俊章 (2012). 大学生における古典的対人恐怖心性の発達的变化. 横浜国立教育人間科学部紀要, I (教育科学), 14, 63-70.
- 堀井俊章 (2021). 大学生における対人恐怖心性の時代的推移 (続報). 横浜国立大学教育学部紀要, I (教育科学), 4, 176-182.
- 北山修 (2002). 対人恐怖, 小此木 啓吾・北山 修 (編). 精神分析事典 (p.320). 岩崎学術出版社.
- 松原敏浩 (1990). 部活動における教師のリーダーシップ・スタイルの効果 中学校教師の視点からのアプローチ. 教育心理学研究, 38, 3, 312-319.
- Magan Spokas & Richard G. Heimberg (2009). Overprotective Parenting, Social Anxiety, and External Locus of Control: Cross-sectional and Longitudinal Relationships, Cognitive Therapy and Research, 33, 543-551.
- 水間公介・溝口剛・渡辺亘 (2015). 幼少期の親の養育態度と前青年期の友人関係の持ち方が青年期における対人恐怖心性に及ぼす影響. 教育実践総合センター紀要, 32, 33-48.
- 鍋田恭孝 (1997). 対人恐怖・醜形恐怖「他者を恐れ・自らを嫌悪する病い」の心理と病理. 金剛出版.
- 小川雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本語版の信頼性, 妥当性に関する研究. 精神科治療学, 6, 1193-1200.
- 沖本忠生 (2001). 自己愛の病理としての対人恐怖—発達の観点からの検討—. 臨床教育心理学研究, 1, 95-103.
- 大久保純一郎 (2012). 対人恐怖心性と養育体験の関係性について. 帝塚山大学心理学部紀要, 1, 191-199.
- 崔王芬 (2018). 部活動経験が大学生のソーシャルスキルに与える影響. 日本教育心理学会総会発表論文集, 60, 431-431.
- 杉山智風・小関俊祐・菊島勝也 (2019). 対人恐怖心性に対する社会的スキルの自己評価と親和動機の影響. ストレス科学研究, 34, 45-50.
- 田中圭・宮前淳子 (2016). 浅い関係で用いられるスキルに関する研究. カウンセリング研究, 49, 3-4, 139-150.
- 田中良仁・吉井健治 (2005). チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響. 心理臨床学研究, 23, 1, 98-107.
- 山崎久美子・吉野真紀・木下利彦・小野純平 (2012). 大学生における対人恐怖心性, ふれあい恐怖心性と両親の養育態度について. 臨床心理学研究, 29, 6, 673-682.

Effects of high school club activities on anthropophobic tendency in university students -Focusing on Chumship Experience and Social Skills-

Takaharu ISHIKAWA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

This study examined the characteristics of groups that suppress anthropophobic tendencies based on high school club activities. First, assuming “parental nurturing attitude,” “chumship experience,” and “social skills” as factors regulating anthropophobic tendency, multiple regression analysis was conducted with these as explanatory variables and anthropophobic tendency as the objective variable. These results suggest that “relationship initiation, relationship maintenance,” and “assertiveness skills” significantly suppress anthropophobic tendencies. Next, in order to understand the group characteristics that enhance “relationship initiation skills,” “relationship maintenance skills,” and “assertiveness skills,” which are thought to suppress anthropophobic tendency, multiple regression analysis was conducted with club activity characteristics as the explanatory variable and social skills as the objective variable. The results showed that “forced club membership” was associated with “relationship initiation skills” and “club advisor’s performance-based approach” and “number of people at the competitions and presentations” with “assertiveness skills”. Therefore, it is conceivable that forming a group with these characteristics can suppress anthropophobic tendencies.

Keywords: anthropophobic tendency, group characteristics, social skills

